

『東瀛詩選』編纂に関する一考察

— 明治漢詩壇と日中関係との関わりを中心に —

川邊 雄大

はじめに

兪樾^①撰『東瀛詩選』(四十卷補遺四卷、明治十六年(一八八三)刊、以下『詩選』)は、五三七人のべ五三一九首という龐大な量の日本漢詩を収録した漢詩集であり、その編纂の受諾から版刻までは、約一年三ヶ月(明治十五年(一八八二)夏～十六年(一八八三)十月)という短期間のうちに行われた。

『詩選』の編纂に関しては、これまでに次の研究がある。

岡井慎吾「北方心泉上人」^②は、岡井の師である三宅真軒^③から『詩選』編纂に関する伝聞を述べている。吉田三郎「兪樾尺牘」^④は、北方心泉^⑤の自坊である常福寺(石川県金沢市)に所蔵する兪樾が心泉に宛てた「曲園太史尺牘」(乾・坤、以下「兪樾尺牘」)十四通を紹介し、日本語訳を附しており、李慶『東瀛遺墨—近代中日文化交流稀見史料輯注』^⑥は、同尺牘を翻刻している。高島要『東瀛詩選 本文と総索引』^⑦は、『詩選』全文の翻刻と索引を作成するとともに、採録された典拠について考察を加えている。小川環樹「中国人が観た江戸時代の漢詩」^⑧は、兪樾の選択基準・嗜好などについて述べており、蔡

毅「兪樾と『東瀛詩選』」・王宝平『近代中日学術交流の研究』⁹は、「兪樾尺牘」など常福寺所蔵の資料を使用して編纂過程について考察を加えている。

この他、島力崗「『東瀛詩選』研究に関する二、三の問題」¹¹および同「兪樾と李鴻章——『東瀛詩選』成立をめぐる——」¹²は、岸田吟香が兪樾の持つ人脈、具体的には曾国藩・李鴻章に繋がる人脈を構築するために『詩選』が編纂された可能性を指摘している。

さて、『詩選』の編纂がいかにしてなされたかは、興味深い問題である。これまでに、明治期に東本願寺上海別院において布教活動を行った北方心泉や松林孝純¹³らが、『詩選』編纂の発案者である岸田吟香と兪樾の聯絡役を担ったことが知られ、常福寺には、『詩選』編纂に関する資料として前述した「兪樾尺牘」(十四通)のほか、心泉が兪樾に宛てた書翰の「心泉草稿」(七通)などが残されている。

本稿では、先行研究や常福寺資料に加えて、『詩選』が編纂された当時の日本国内における漢詩壇や日中関係等を配慮に入れながら、『詩選』の編纂過程、漢詩人の採録状況、日中双方の編纂意図の相違、さらに兪樾や刊行された『詩選』が日本の漢詩人や支那学者に与えた影響とその評価について検討する。

一 明治前期の漢詩壇

本章では、明治前期すなわち明治初年から『詩選』が編纂された明治十五・六年(一八八二・三)頃までの日本国内における漢詩壇について述べておきたい。¹⁴

明治初年、有力な詩壇の勢力として、①広瀬淡窓の咸宜園門下(玉川吟社・香草吟社)、②岡本花亭門下の江戸詩家中の遺老、菅茶山の詩風を伝える勢力、③梁川星巖の玉池吟社門下(下谷吟社等)、という以上の三つの系統があった。

咸宜園は広瀬淡窓によって設立された私塾であり、王孟章柳派を宗とする淡窓のもと、詩をよくする門下生として、淡窓の弟旭莊、淡窓の義子青村、旭莊の子林外、維新後明治新政府の官僚となる長三洲などがいた。咸宜園は昌平黌や藩校とは異なり、武士階級以外にも開放されており、塾生の三分の一を僧侶が占め、中でも真宗僧が多いことが特徴であった。東本願寺僧の門下生の中には、維新後に上海で布教を行う小栗栖香頂・渡辺徹監や、香頂の弟小栗布岳、『詩選』にも漢詩が採録された平野五岳などのほか、大坂の旭莊塾で学び、後に上海別院輪番となる松本白華¹⁵などがいた。そして、維新後は明治四年（一八七二）に東京で、長梅外・三洲親子や秋月橋門・士新親子らが中心となって、玉川吟社・香草吟社を結成して活動していた。しかしながら、明治十年（一八七七）あたりを境として相次ぐ同人の死により衰頹し、明治二十八年（一八九五）の長三洲の死によってその活動を停止した。

梁川星巖門下は、小野湖山・大沼枕山・向山黄村・遠山雲如・江馬天江・鱸松塘・岡本黄石・森春濤・小原鉄心・草場船山・谷如意などがおり、濃尾出身の文人を多数擁していた。維新後はとくに小野湖山・岡本黄石・大沼枕山らが東京で活躍し、中でも枕山が創立した下谷吟社が、前者二勢力を圧倒することとなった。

一方、森春濤は明治七年（一八七四）に上京、茉莉吟社を設立して明末清初の詩を紹介し、明治八年（一八七五）四月に『東京才人絶句』、同年七月に漢詩雑誌『新文詩』、明治十年（一八七七）十月に『清三家絶句』、明治十一年（一八七八）八月に『清廿四家絶句』などを出版し、枕山らと勢力を交替することとなった。

また、成島柳北も自らが主宰する『朝野新聞』や、漢詩雑誌『花月新誌』に漢詩を掲載し、柳北の歿する明治十七年（一八八四）まで続いた。

この他、昌平黌出身者を中心に明治五年（一八七二）に結成された旧雨社があり、小野湖山は批評を担当する重鎮として活躍した。『詩選』の編纂について議論がなされたのもこの旧雨社であり、湖山をはじめその他の同人から様々な意見が出されることになる。

このように、『詩選』が編纂された明治十五・六年（一八八二・三）頃の日本国内における漢詩壇は主に、前出の三系統から大沼枕山・森春濤・成島柳北の三系統となったのである。¹⁶

次に、こうした背景をもとに幕末維新期の松本白華について見ていきたい。

前述の通り、白華は幕末に大坂の旭莊塾で学び、明治四年（一八七二）に上京し宗門の活動を行うかたわら、新門主の大谷光瑩（現如）とともに成島柳北・大槻盤溪・東條琴台ら江戸の漢詩人たちと交流していた。¹⁷とくに白華と柳北は浅草本願寺内の塾で共に教えており、同年に出版した白華の漢詩集『金城繁華三十閨』には柳北の評が掲載されている。明治五年（一八七二）九月には、二人は共に宗教事情視察のため渡欧するなど関係は深かった。一方で前述の通り、白華は咸宜園出身者らで結成された、玉川吟社・香草吟社の同人でもあり、明治五年（一八七二）から十年（一八七七）にかけての全盛期に存籍していた。現在、白華の自坊である本誓寺（石川県白山市）には同人たちの集合写真¹⁸や、上海別院輪番時代に交流した清末文人（陳鴻誥・王治梅・錢子琴・孫士希・曹受圻・蔣文虎・毛祥麟・梁景鴻）の序跋・批点を附した詩稿などが所蔵されている。

明治十年（一八七七）、白華とともに上海に渡航し、のちに『詩選』編纂に関与することになる心泉は、白華が主宰する遙久社で学んでいたが、維新後に上京し明治六年（一八七三）に、洋行より帰国した柳北から英語や漢詩を学んでいる。現在、常福寺には柳北や菊池三溪の批が入った心泉の詩稿が所蔵されているほか、柳北が主宰していた漢詩雑誌『花月新誌』¹⁹にも投稿している。

このように、白華や心泉ら当時の真宗僧は咸宜園や柳北らの詩壇と近い関係にあったといえる。

二 明治前期の日中関係

本章では、明治初年から明治十五・六年（一八八二・三）にかけての日中関係について述べる。

明治六年（一八七三）に日清修好条規が締結され、条約締結交渉などにあつた副島蒼海や竹添井々⁽²⁰⁾はその後、清国で文人・政治家らと交流した。とくに井々は日本人では初めて兪樾に面会した。明治十年（一八七七）には清国公使館が東京に設置され、何如璋・黄遵憲らが外交官として派遣されたほか、公使館員に附随する形で王治本が、中国語教師として周幼梅・葉松石らが、このほか衛鑄生・陳鴻誥などの主に海上派を中心とする文人が来日し、各地で日本文人との交流が開始された。

一方、東本願寺は明治六年（一八七三）、他宗に先駆けて小栗栖香頂を北京に約一年間派遣し、布教の可能性を探った。明治九年（一八七六）八月、上海に別院が設置され、日本人留学僧に対する中国語（南京語・上海語）教育と、中国人向けに中国語による説教が開始され、翌明治十年（一八七七）十月には白華・心泉が派遣された。

しかし、この中国布教には大きな障碍があつた。それは、欧米列強には条約によつて保障されていた布教権が、日清修好条規には何等明記されておらず、思うように布教活動が出来ないことであつた。従来、明治十四年（一八八一）頃に布教権の問題に東本願寺は直面していることは知られているが、常福寺に所蔵する「上申書」（草稿）によると、上海別院が設置される明治九年（一八七六）八月二十日以前に、すでにこの問題について東本願寺は認識している。⁽²¹⁾

そのため、日本に渡航経験があり日本語の堪能な筆墨商の馮耕三の仲介により、売画を主体とするいわゆる海上派文人との漢詩文を介した交流が盛んとなった。だが、心泉をはじめ当時上海に在留していた内海吉堂・岸田吟香ら日本文人の海上派に対する評判は芳しくなく、清国政府要人との人脈を持つ人物達でもなかつた。

こうした状況下で、布教活動を円滑に進めるために、李鴻章や曾國藩と人脈のある文人、兪樾に接近することとなつたのである。かくして、明治十四年（一八八一）五月に心泉は竹添井々⁽²³⁾からの紹介状を持参して、岸田吟香らとともに杭州の兪樾を訪問したが不在であつた。そのため、心泉は翌年五月に再び杭州へ行き、兪樾と面会することとなつた。⁽²⁴⁾ 吟香が兪樾に

『詩選』を提案するのは、この後のことである。

当時、日本政府は日清修好条規が、明治十六年（一八八三）四月二十九日をもって終了するものと見なしており、東本願寺は政府によって条約改正交渉が開始されるとものと考えていた。そのため、東本願寺は布教権獲得について岩倉具視・井上馨等に陳情を行ったほか、条約改正後の布教に備えて明治十六年（一八八三）五月二十三日に上海別院の建築を着工した。しかし、条約改正交渉は一向に開始されず、同年九月十二日に別院は落成したものの、九月十四日に清国布教中止が決定され、十月四日にはその知らせが上海に到達した。そして、十月九日に『詩選』が刷上った旨を知らせる「兪樾尺牘十四」が書かれたのであった。

このように、『詩選』が編纂された時期は、東本願寺が清国内において条約改正後を見越して布教活動を準備している最中だったのである。

また、岸田吟香は明治十三年（一八八〇）、上海に樂善堂支店を開設し、医薬品販売の外、和刻本やその版木を輸出していたほか、和刻本や科挙試験用の袖珍版の販売を行った。とくに、明治十四年（一八八一）から十六年（一八八三）にかけては袖珍本をはじめとする漢籍等を多数刊行している。一方、日本国内ではすでに清国公使館員や清国文人によって著された書籍が複数出版されていた。また、葉松石や公使館員の姚文棟・黄梅吟によって日本漢詩集が編纂される計画があり、⁽²⁵⁾実際に明治十六年（一八八三）三月には陳鴻誥が編纂した『日本同人詩選』が出版された。恐らく吟香は、清末文人や日本人との交流を通じてこのような出版計画を知っていたと思われる。それゆえ、吟香としては公使館や来日文人とは別異系統の人物である兪樾に接近して、『詩選』出版を企劃したと思われる。⁽²⁶⁾

三 『東瀛詩選』編纂の過程

本章では、『詩選』の編纂過程について述べたい。

すでに蔡毅氏によって『詩選』の編纂過程が明らかにされ、王宝平氏が、前述した「兪樾尺牘」十四通や「心泉草稿」七通等を使用して年表化を行っている。⁽²⁸⁾ 本稿では若干の新しい資料を補いつつ、要点を整理したい。

前述の通り、明治十五年（一八八二）五月に心泉が兪樾に杭州で面会したのは布教目的であった。その後、吟香による『詩選』編纂の依頼を兪樾が受諾したのは「兪樾尺牘三」（日附不明）であり、明治十五年（一八八二）六月から八月の間に書かれたと推測され、尺牘中に以下のような記述がある。

（前略）至岸田吟香先生欲以貴国諸名家詩集、付弟選理。弟學術蘊疏、何足握詞人之秤。惟東瀛文物、企仰素深。果能探其淵海、擷其精華、何幸如之。（以下略）

（岸田吟香先生が、貴国諸名家の詩集の選択を小生に求められています。小生学問浅く、到底詩人の秤を取ることはできません。ただ、日本の文物についてはかねて敬仰致しておりますので、もしその淵海を探つて精華を摘むことができますれば、この上なき幸せです）（以下略）

このように、兪樾が日本漢詩集の編纂を承諾したのは、日本人の著作や日本の風物に対して関心を持っていたからであった。慶応三年（一八六六）に荻生徂徠『論語徴』を読み、明治十年（一八七七）には竹添井々から安井息軒『管子纂詁』を贈られた他、塩谷世宏『宕蔭存稿』、林春信『梅洞集』を読んでいる。さらに、明治十年代、杭州に在住していた日本人画家、内海吉堂から日本の十三の怪奇談を入手し、『右台仙館筆記』に収録し、その後編纂した『茶香室叢鈔』には、『先哲叢談』などから日本の記事を収録している。⁽²⁹⁾

その後、心泉は「心泉草稿三」（明治十五年八月二十九日）の中で、次のように述べている。

至敝友吟香為求選敝國詩一節、渠業現為歸東瀛冥幽探、遂得二百五十余部寄來、茲特隨函奉、另有目錄開明、至祈檢納。所選□□卷數悉憑尊裁、并乞賜序及凡例・評語。

(私の友人吟香が、わが国の漢詩を選択する件ですが、現在日本に帰って資料を蒐集しており、ついに二百五十部を送ってきました。ここにお送りして、目録とともにご覧に入れます。選択や巻数は悉くお任せするとともに、あわせて序文・凡例・評語をお願いします)

これに対して愈樾は、「愈樾尺牘五」(明治十五年十一月一日)の中で、心泉に対して「日前由松林上人交到惠書并吟香先生所寄貴國詩集一百七十家。弟適臥病、未克披覽。(先般松林上人に託された親書並びに吟香先生からの貴國詩集一百七十家を頂きましたが、小生たまたま臥病、いまだ拝見しておりませんでした)」と述べ、つづいて『詩選』編纂に関して具體的事項を述べている。

弟意選詩当以人分、不以体分。每人選古今体詩若干首、其人以時代先後為次。幸有「和漢年契」一冊、尚可稽考、不致顛倒後先。但見在披閱未周、不知各集中均有年号可考否。至其人名下、例應備載爵里。然恐不尽有。微不至其字某甫、亦不可缺。(中略)至于点圈評語、皆古書所無。中華自前明以來、盛行時文、益以房書体例、變古書面目、為識者所噴。愚意似可不必如此。每人之下、就其全集中、或評論其生年、或摘錄其未選之佳句、使讀者因一斑而得窺全貌、且于論世知人、不為無補。茲姑借物君茂卿一人、先撰數語、以見体例、別紙錄呈。乞軫寄吟香先生定之(中略)再啓者、此書選成(多少未定、姑且約計)約可三千余編、頗亦可成大觀。尊論欲於上海刊行、即照拙書版片大小、甚為簡便。弟處有熟識刻工陶升甫、人甚妥當。弟之各書、皆其所刻。大約刻白版、則每百字不過一百六十文、刻梨版、則每百字須二百文、

似較上海刻資稍廉。且近在吳下、弟得就近指点、則書款亦無錯誤、似更妥。書之与吟香先生酌之。弟再頓首。惟在蘇刻、則一切查核字数并絡続交付刻費、亦得一人經手。弟止任選撰、不能并此等事也。

(詩は人によって分けることとし、詩体によって分けられない方がよいと考えます。人ごとに古体今体若干首を選び、人は時代順に排列します。幸い「和漢年契」一冊が参照できますので、前後顛倒の恐れはありません。ただし、まだ隅々まで見ておりませんので、各集中にみな年記が入っているかどうかわかりません。人名については、その下に官位、出身地を載せておくべきですが、恐らく揃っていないでしょう。字は欠いてはなりません。(中略)。さて圈点や評語に至ってはみな古書になきもの、中国では明以来時文が盛行し、俗書の体例を以てして古書の面目を変えてしまい、識者の笑う所となっております。このような事は無用なるべく、それよりも、作者ごとの下にその全集について、あるいはその半生について論じ、あるいは選に入れなかった詩の佳句を摘録すれば、読者は一斑によって全貌をうかがうことができ、かつ世を論じ人を知るの一助ともなつてよいと考えます。いま仮に物茂卿氏について数語の文を作り、体裁を別紙に示しますから、吟香先生に転送してお決め下さい。(中略) この選集は、数量未定ながら、ざっと見込んで三千餘篇、かなりの大部の物になりそうです。ご指示によれば、上海で刊行したく、拙著の版型に合わせるのが便宜との事。当地に懇意の刻工陶升甫なる者があり、適任です。小生の著書は皆彼が刻したもので、並の版では百字が百六十文にすぎず、梨版では百字が二百文、上海よりやや安そうですし、その上蘇州の地元となれば、小生が身近で指図し、体裁の誤りもなくなつて一層よかろうかと思ひます。吟香先生とおはかり下さい。)

このように、兪樾は十一月の段階で、すでに当時上海別院にいた心泉を通じて吟香から編纂に関して、巻数・序跋などを一任されており、吟香から送られた漢詩集二百五十集のうち百七十集を心泉から受領している。兪樾は病のため、これらの詩集を詳しく見ていなかったが、排列、人物の紹介、採録数、刻工、版式、料金など全体の構想をすでに決めていたので

あった。これは、刊行された『詩選』版本の版式や序、あるいは例言などに記載された編輯方針と比較しても、実際の採録数以外ほぼ一致している。

その後、『詩選』の編纂は進行し、「兪樾尺牘六」（明治十六年一月一日）で兪樾は、「惟此選少亦当有百七八十卷、儼然巨編。（思うにこの選集は七八十卷以上の堂々たる巨編になります。）」とのべ、全体を七八十巻と見積もった。そして、「兪樾尺牘九」（明治十六年二月二十四日）では、

頃已選定四十卷、又從諸家選本中選出五百余首、定為「補遺」四卷、茲將目錄寄上清鑒、并之転寄吟香翁一閱。刻工陶升甫去歲已刻成一卷、茲印呈裁定。

（このたび四十巻を選定し、また諸家の選本の中から五百餘首を選定して補遺四巻といたしました。ここに目録をお目につけ、また吟香翁へもご転送下さるようお願いいたします。刻工陶升甫は昨年すでに一巻を刻しおりましたので、ここに刷つて裁定に供し、あなたと吟香氏の認可があれば引続き刻させます）

とあり、ここに四十巻・補遺四巻という実際に刊行される形が完成したのであった。しかし、「兪樾尺牘十」（明治十六年三月十七日）では、「吟香未知有無還信、此書何時開雕。（吟香氏から返事がありました。この書はいつ開版するのですか。）」と述べているように、兪樾は刊刻の許可を吟香に求めたが、吟香から返事がなかったようである。

一方、東京では三月十六日に旧雨社の会が開かれた折、吟香は初めてメンバーの文人たちに『詩選』が編纂されていることを打ち明け、小野湖山や同人達から、『詩選』の採録状況について様々な意見が出されたが、この点については後述する。この件について、吟香は湖山からの手紙も同封して心泉に送り、心泉が兪樾に伝言したのが、「心泉草稿七」（日附不明、明治十六年三月二十二～二十七日）である。しかし、岸田との聯絡係を担ってきた心泉は病のため三月二十八日に帰国し、

長崎で療養生活を送ることになり、編纂の取次が出来なくなった。その後は上海別院の白尾錦東と、蘇州にいた真宗僧・松林孝純が上海に移動して、愈樾との連絡および残務処理をおこなった。⁽³⁰⁾

この年の十月、『詩選』は完成し心泉に送附された。「愈樾尺牘十四」(明治十六年十月九日)では以下のように述べられている。

(前略) 吟香居士属選貴国詩、頃剞劂告成、刷印清本、装成十六冊、寄呈清覽。如有錯訛、乞吾師与吟翁校正、以便再付刻工修改。(以下略)

(吟香居士)委嘱の貴国詩選、このほど完刻、清本に印刷して十六冊に装成し御覽に入れます。もし誤りがありましたら、上人と吟香翁とに校正していただき、更に刻工に命じて直させます。(以下略)

同年十二月十日には、『郵便報知新聞』に掲載された「上海景況(前号の続き)」中に『詩選』の編纂が完了した旨の記事が書かれているが、これによると『詩選』は刻し終わったものの、この時点では初編のみが蘇州で出版され、まだ上海の書店では販売されていなかったようである。⁽³¹⁾

さらに、翌明治十七年(一八八四)十二月二十八日に吟香は松林とともに蘇州の愈樾を訪問し、『詩選』等の日本国内における販売許可を求めている。⁽³²⁾ 同年四月十七日の『朝野新聞』⁽³³⁾に、『詩選』初帙四冊販売の楽善堂広告が出されたが、実際に全てが出揃うのは更に後のことであった。⁽³⁴⁾ 現存する『詩選』が少ないこと、出版総数はそう多くはなかったものと思われる。

四 漢詩の採録について

さて、『詩選』ではいかなる人物の漢詩が採録されたのであろうか。以下、五十首以上採録された人物を排列する。

広瀬旭莊	卷二十三・二十四	一七五首
服部南郭	卷三	一二五首
釈六如	卷三十七	一二三首
菅茶山	卷十一	一二〇首
高野蘭亭	卷五	一一七首
梁川星巖	卷十六	一〇一首
広瀬淡窓	卷十七	九〇首
大窪詩仏	卷十九	八六首
大沼枕山	卷三十一	八六首
頼杏坪	卷十三	八二首
小野湖山	卷二十二	七六首
橋本静甫	卷三十四	七六首
室鳩巢	卷七十三	七三首
山梨稻川	卷十五	六八首
長南梁(梅外)	卷二十九	六四首

小原栗卿（鉄心）	卷三十二	六四首
大槻盤溪	卷三十二	六三首
大内熊耳	卷八	六〇首
村瀬栲亭	卷九	五十九首
横山致堂	卷二十	五八首
中島櫻隱	卷十八	五六首
菊池溪琴	卷十八	五三首
山田翠雨	卷三十	五三首
竹添井々	卷三十五	五三首
积元政	卷三十九	五〇首

以上、二十五名が挙げられるが、系統を分類すると大体以下の四区分に分けられよう。

- 1 江戸初期、五山時代の唐宋詩風を継ぐ系統
室鳩巢・大内熊耳・积元政
- 2 徂徠の流れを汲む護園派
服部南郭・高野蘭亭・山梨稻川
- 3 清新派および江湖詩社系統
积六如・梁川星巖・大窪詩仏・大沼枕山・頼杏坪・小野湖山・橋本静甫・小原鉄心・大槻盤溪・村瀬栲亭・横山致

堂・中島棕隱・菊池溪琴・山田翠雨

4 咸宜園系統

広瀬旭莊・広瀬淡窓・長梅外

愈樾は序の中で、「其始猶沿襲宋季之派、其後物徂徠出、提唱古学、慨然以復古為教、遂使家有滄溟之集、人抱弇洲之書、詞藻高翔、風骨嚴重、幾与有明七子並轡齊驅、伝之既久、而梁星巖大窪天民諸君出、則又変而抒写精靈、流連景物、不屑以摹擬為工、而清新俊逸、各擅所長、殊使人讀之、有愈唱愈高之歎（其の始めは猶ほ宋季之派に沿襲し、其の後物徂徠出でて、古学を提唱し、慨然として以て復古の教を為し、遂に家々滄溟の集有り、人々弇洲の書を抱き、詞藻高翔、風骨嚴重にして、幾ど有明の七子と轡を並べ齊しく驅る、之を伝ふること既に久しくして、而て梁星巖・大窪天民諸君出づれば、則ち又變じて精靈を抒写し、景物を流連し、摹擬を以て工と為さず、而して清新俊逸、各々長ずる所を擅にす、殊に人をして之を読み、愈々唱へて愈々高き歎有らしむ）」と、江戸時代の日本漢詩の流れを1から3までの系統を挙げて概説しており、採録も各派および咸宜園系統からそれぞれ採録している。

一方、後述するように、吟香が指摘しているように祇園南海をはじめとして、本来採録されてしかるべき人物が採録されていない³⁵。例えば、多くの研究者が指摘しているように、山本北山³⁶といった人物も採録されていない。一つは愈樾の採録に対する態度があげられるが、日本側が提供した漢詩集に偏りがあったことは、これまでの研究で述べられている³⁶。

『詩選』に採録された漢詩は、『詩選』の巻頭や人物紹介、あるいは尺牘などから判断するに、主に刊行された詩集から採録されたと思われる、序文・例言によると、『日本詩選』や『先哲叢談』も参考とされたのであった。

この他、蔡毅氏や高島要氏の研究によって、使用されたと思われる詩集が推測あるいはほぼ特定されている³⁷。

なお、岡井慎吾が師匠の三宅真軒からの伝聞によると、『詩選』編輯時に使用した詩集類が常福寺に残されており、それ

らの詩集には往々、編輯時に兪樾が行った字句の訂正が見られたという。しかし、岡井が「北方心泉上人」を連載した昭和十八年（一九四三）時点で、それらの詩集類は完全に散逸していた。⁽³⁸⁾

さて、『詩選』の採録でとくに注目すべき点として、これまで指摘されているのは、広瀬旭莊と山梨稻川を高く評価したことであろう。従来、旭莊よりもむしろ兄の淡窓の評価の方が高かったし、山梨稻川は、この『詩選』に漢詩が採用されたことによって一躍脚光を浴びることになった江戸後期の説文学者であるが、『詩選』の資料となった『稻川詩草』は木活字本で入手が困難であった。⁽³⁹⁾では、兪樾はいかにしてこの版本を目にすることが出来たのであろうか。『詩選』に關与した人物の周囲には、心泉の友人で小学・金石学にくわしい三宅真軒がいる。『詩選』が編纂されている明治十五・六年（一八八二・三）当時、真軒は金沢の本屋で働いており、書籍に詳しいだけでなく、書籍を蒐集しやすい立場にあった。明治十七年（一八八四）に『石川県勸業博物館書目』を、翌明治十八年（一八八五）には心泉の書学習得のために主に小学金石類を収録した『文字禅室必備書目』（常福寺藏）を編纂している。つまり、真軒は上海に滞在し、日本漢詩を蒐集できない心泉に代わって、彼が漢詩集を蒐集するなど、採録に關与した可能性がある。

この他、僧侶の詩が多数採録されていることも大きな特徴である。後述するように、「岸田吟香書翰」（明治十六年三月二十一日）の中で、小野湖山は選定目録に挙がっている僧侶の詩の多くは省くべきであると述べているが、具体例として浄土宗僧侶である養鷗徹定（のち知恩院住職・浄土宗管長）の編纂にかかる増上寺僧侶の漢詩集『縁山詩叢』に収録されている作品が数多く採録されている点があげられる。徹定と白華は、白華が教部省の官吏であった時期（明治五〜十年、洋行期を除く）に徹定は同省の教導職として交流があった。現在、白華文庫には養鷗徹定著作の鈔本や刊本などが所蔵されているが、中には鈔本『瓊浦筆談』といった他では所蔵されていないものもある。このことを念頭におかなければ、この採録は説明しにくいと考える。

このほか、『詩選』に採録された長三洲・中島子玉・平野五岳・北方心泉については、刊行された漢詩集ではなく、未刊

の稿本が使用されているが、このことに関しては後述する。

撰者の兪樾は、『詩選』の採録に関して、どのような態度を取ったのであろうか。小川環樹などは山梨稻川等の漢詩を例として、兪樾は採録に際して声調に関しては非常に厳格であったと述べているが、⁽⁴⁰⁾その一方で岡井慎吾は、三宅真軒の言葉として次のように述べている。⁽⁴¹⁾

嘗て東瀛詩選に関連して私は真軒先師より次の如きことを承つた。上人が曲園翁に問はれた話か、或は他の筋からかは明かでないのだが、私は多分に上人から出たもののやうに思ふ。曰はく東瀛詩選に採られた詩政の厳重さは何れ程だらう。国朝別裁集の取捨の標準で臨んだら何如。曲園の答に「殆ど撰に入るまい。東人の詩は意旨は有るが声調諧はぬ。声調が佳いと意旨が通らぬ。双方とも格に入るは殆ど無いと云つても蓋し不可は有るまい。」

日本人の詩を採るために、長所を採り短所に目をつぶる方針がとられたことが知られるのである。

五 『東瀛詩選』編纂における日中双方の認識相違

以上、『詩選』の編纂過程について見てきたが、明治十六年（一八八三）三月十六日の旧雨社の詩会で問題になった点について、詩会后に心泉宛に書かれた「岸田吟香書翰」（明治十六年三月二十一日）をもとにして見ていきたい。まず、書翰の冒頭に次のように述べられている。

一 前便申上置候「東瀛詩選」一条、去ル十六日「旧雨会」⁽⁴²⁾ニ而、小野湖山・重野安繹⁽⁴³⁾・岡千仞⁽⁴⁴⁾・森春濤⁽⁴⁵⁾・鱸松塘等諸

子二相謀候処、諸子中未ダ此挙アルコトヲ不知者多ク候ニ付、議論百出ニ而、逆も一定ニ決シ難クト被存候而、遂ニ其儘ニ而其場ハ散ジ申候。

(一) 前回の手紙で申上げた『東瀛詩選』編纂の件についてですが、去る三月十六日に行われた「旧雨社」の詩会において、小野湖山・重野安釋・岡千仞・森春濤・鱸松濤らにはかったところ、参加者の中に未だにこの編纂のことについて知らない者が多く、議論百出となり結論が出ず、ついにそのまま散会となりました。

岸田が兪樾に『詩選』編纂を依頼して約半年が経過してから、多くの旧雨社の文人達は初めてこのことを知った。つまりこの時まで旧雨社の文人達は関与していなかったのである。

次に、本来ならば採録される人物が選定されていないことが問題となり、旧雨社で詩集を蒐集した上で、兪樾に送附することとなった。

一 重野・岡等ト尚評議仕候処、古人之内ニモ猶此選ニ漏レ居候者多ク御座候。有名之大家ニ而、祇南海⁽⁴⁷⁾・秋玉山恒遠⁽⁴⁸⁾・雨森芳洲⁽⁴⁹⁾・片山北海⁽⁵⁰⁾・武富圯⁽⁵¹⁾・韓大年⁽⁵²⁾・北條霞亭⁽⁵³⁾・柏如亭⁽⁵⁴⁾・北川明皮⁽⁵⁵⁾・家里衡⁽⁵⁶⁾・河野鉄兜等之類、猶多ク可有之ト奉存候。是等之詩集も多分上木ニ相成居可申候付、探索之上御送り可申候。

(二) 重野・岡とさらに相談したところ、古人の漢詩の中でも今回の選定に漏れた者も多く、有名な大家に、祇園南海・秋山玉山・雨森芳洲・片山北海・武富圯南・韓大年・北條霞亭・柏木如亭・北川明皮・家里衡・河野鉄兜らをもっと採録された方が良いと思います。これらの人物の詩集は出版されていると思いますので、探した上お送りいたしたいと存じます。

そして、梁川星巖・広瀬淡窓を採録する巻十六で一旦刊行を停止するよう求めている⁽⁵⁷⁾。

一方で、選定されるべきでない人物が採録されていることも問題となった。書翰中に、

一 重野・岡・小野・巖谷等之説ニ而ハ、此度御示シ被下候選定目錄ニ、卷二十九以下ニ載リ居候人ニ者、多ク者皆詩名も世ニ聞江ズ、餘リ誰モ不知者共ニ而、中ニ者川路利良⁽⁵⁸⁾之如キ人物も有之、又少年生も右之、又長英⁽⁵⁹⁾・岡千仞之如キ、未ダ詩集ヲ刊行不致候者も有之候間、此等之詩者定メシ「明治詩文」或ハ「新文詩」等々御抜キ取りニ相成候事ト奉存候へども、此度之「東瀛詩選」者 清朝第一流之大家、曲園先生之御選定ニ而、我邦古来未曾有之盛挙ニ付、相成丈精選ニ致シ度キ者ニ御座候間、右等無有名之俗作者暫ク御除キ置キ被下度候ト申スコトニ御座候。

(一) 重野・岡・小野・巖谷らが言うには、このたびお示いただいた選定目錄で、卷二十九以降に採録されている人々の多くは、みな詩の評判も世に聞かず、あまり誰も知らない人達であつて、中には川路利良のような人物も採録されておられ、また少年もあり、長三洲・岡千仞のようにまだ詩集が刊行されていない人物も採録されております。これらの漢詩は恐らく『明治詩文』あるいは『新文詩』などから採録されたと思いますが、このたびの『東瀛詩選』は清朝第一流の学者である曲園先生の選定で、わが国始まって以来の未曾有の盛挙でありますので、なるべく精選にいたしたく思いますので、右のような有名でない俗作のものは除外願いたく存じます。

とあるほか、吟香自身も以下のように述べている。

一 曲園先生者、或ハ一人ニ而モ多ク詩ヲ出シ候御考可モ不知ト被存候。但シ先般以来、古人并ニ現今人之詩集類ヲ好不好ニ不拘、只ムヤミと多ク送り差上候者、皆々其選ニ入ランコトヲ望ミ候訳ニ者無之、御編輯之料ニ差上候事ニ御座

候。然二曲翁者必ラス其人々ノ詩ヲ每人二二首ツ、者取り遣シ度トノ思召ニ而、ツマラヌ俗作迄モ無抛御選入相成候様ノ事無之トモ不被測ト奉存候。

(一) 愈曲園先生はもしかすると、一人でも多く漢詩を採録したいお考えかも知れないと思います。しかし、先般以来古人ならびに現今人の漢詩集を好むと好まざるとにかかわらず、ただむやみに多く送りましたのは、全てが採録されることを望んだわけではなく、あくまで編輯の材料としてお送りしたのです。しかし、愈樾は必ずその人々の漢詩を一人当たり一二首ずつ採録したいとの意図であり、つまらぬ俗作までも選定されていることがないとも思われます)

せつかくの大儒愈樾による日本人漢詩集の編纂という、これまでにない機会であるから、なるべく精選して、余り詩人として有名でない人物は除外し、また長三洲や岡千仞など著名であつても詩集が刊行されていない人物の詩を、「明治詩文」「新文詩」のような漢詩雑誌から安直に収載することのないように求めている。また、吟香としては送附した資料は、あくまでも参考程度のもも含まれており、できるだけ多くの人物の詩を採録してもらつつもりではなかった。そして、重野成斎は愈樾より送られた選定目録の中から、採録するに相応しくない人物を抽出したのであつた。⁽⁶⁰⁾

書翰中にあるように、司法省官員でのちに初代警視総監となつた川路利良の漢詩(四首)が収録されたことに、旧雨社の同人や三宅真軒⁽⁶¹⁾たちは非常に不満を抱いていた。これは川路が単に官僚であるからだけではなく、西南戦争に際して西郷隆盛暗殺のため密偵を派遣し、かつての同志たちに銃を向けたとして、当時の人々から評判の悪かつた人物が採録されたことに対する不満であろう。こうした日本国内の状況を知らない愈樾は、川路を西南戦争で賊軍と戦つて功績を挙げた忠勇なる軍人として認識しており、川路が宮中に招待された時をうたつた「禁園観菊」二首などを採録したのであつた。西南戦争後、維新や西南戦争に功績のあつた元勳・軍人達の漢詩集が相次いで出版されたが、『詩選』では川路のみが採録された。この採録についても白華の関与が疑われる。白華と川路は、明治五年(一八七二)九月に同じ船で洋行しており、面識のあ

る人物だったからである。また、西南戦争に際して白華は門主に同行して熊本で救護活動を行っているが、同じ真宗僧で咸宜園出身者である小栗布岳は官軍の密偵をつとめ、平野五岳は戦争前に西郷隆盛と接触していたとされる。⁶² しかも彼ら真宗僧は江藤新平・木戸孝允・三條実美・大久保利通といった明治新政府の中心人物とも関係が深く、川路とも関係が深かったものと思われる。

また、旧雨社同人は、長三洲のように漢詩集が未刊の人物については、「新文詩」「明治詩文」などの雑誌から採録したものと見なしていた。しかし、長三洲について『詩選』では、「長苒、字^マ□□、号三洲、人著有「三洲詩草」一卷。三洲詩未刻、余従小雨山人勉得其小本一冊」と述べており、小雨山人すなわち心泉が持っていた未刊の「三洲詩草」一卷を使用したものであった。当時、上海にいた心泉は日本の資料を充分に蒐集できる立場にはない。だが、心泉の周囲を見ていくと、白華の旧蔵書をおさめた白華文庫には、咸宜園関係者から贈られたと見られる漢詩集が多く所蔵されるほか、白華が安政二年（二八五六）に長三洲から借りて書写した『蘇東坡詩鈔』（末尾に「安政二年乙卯三月以長苒太郎本贍写」とあり）や、長三洲の日記『韻華樓日記』（明治五年）などを所蔵しており、『詩選』採録にあたっては白華の蔵書を使用した可能性が考えられる。

長三洲の他に、中島米華・平野五岳もまた当時漢詩集が未刊であったため、写本から採録されている。

中島米華については、『詩選』では「中島大賚、字子玉、号米華、豊後人、著有「米華遺稿」二卷。（中略）詩未刊刻止有写本」とあり、著書に「米華遺稿」があるものの、写本があるだけで刊行されていない。また、「兪樾尺牘八」（明治十六年二月十七日）には、「日本詠史楽府」一卷（明治二年刊）を使用したことを述べており、同集より採録した漢詩についてはその旨、『詩選』には記されている。一方で、同集に未収録の漢詩も多数採録されているが、国会図書館に所蔵する「米華遺稿」二巻と同種類のものを使用したものと思われる。

平野五岳に関して、「僧岳、字五岳、号竹邨、豊後人。著有「古竹邨舎詩」一卷。以下二人（※心泉・五岳）皆有稿蔵

余処」とあり、五岳には「古竹邨舎詩」一卷があり、五岳と心泉については写本を使用したと述べている。五岳の詩集として、版本では『五岳詩鈔』一卷（明治二十一年）・『続五岳詩鈔』一卷⁶³があるものの、いずれも『詩選』に採録された「題楊妃洗祿鬼図」・「丁酉春日」の二首を収録しておらず、刊行も『詩選』が刊行された後である。写本では、『古竹老衲詩集』⁶⁴があり、いずれも両者を採録するものの、詩題から判断して『詩選』刊行以後、明治二十三年（一八九〇）以後に書かれたものである。白華文庫には、写本「古竹邨舎詩鈔」一卷が所蔵されており、『詩選』に採録された二首が収録され、詩題から判断しても明治十四年（一八八一）以前に書かれたものと推測され、本書が採録にあたって使用された可能性がある。

このように、詩集が未刊かつ咸宜園出身の三名の人物については、旧雨社同人たちも知らない写本が用いられており、彼等の採録に関しては、咸宜園の流れをくむ白華の所蔵する写本を利用した可能性が高いのである。

また、吟香としては商売上の観点から『詩選』の編纂について、次のように述べている。

卷数多ケレバ刻費も多ク、紙価モ多ク相掛リ候ニ付、其書価モ高ク相成可申候。高価ニ而ハ不好消ニ御座候間、極精選ニ而、却而卷数ノ少ナキヲ御願申上候。

（巻数が多ければ刊刻費用も紙代も多くかかりますので、本の値段も高くなりますと宜しくありませんので、精選にして巻数を少なくするようお願い申し上げます）

さらに、「小生生意上ニモ関係有之、大抵壹部価キン二三エン位ニ而売出シ不申候而者、売レ方不宜候ニ付、巻帙之不多ヲ所望仕候也。（私も商売の関係もありますので、値段も大抵一部二三円くらいで売出しませんと、売れませんので、巻数も多くならないことを希望いたします）」と述べ、吟香としては、『詩選』は人物と漢詩を精選し、定価二三円程度の選集にしたかったのである。当時、出版されたばかりの日本漢詩集『日本同人詩選』（陳鴻誥編、明治十六年三月）や、当時出版

されていた森春濤『清三家絶句』『清廿四家絶句』などの大部ではない選集を意識していたのであろう。⁽⁶⁵⁾

このように、旧雨社としては採録する人物を精選し、吟香としても販売するには人物・詩の数とも精選する必要があったのである。

しかし、この書翰を受けとった心泉は帰国間際であった。そのため、「心泉草稿七」（日附不明、明治十六年三月二十二日（二十七日）では兪樾に対して、「吟香回書已於日昨接到。扱述、選法一切尽善尽美、刻工亦佳、敬請転嘱次第開雕。惟三十五卷以下請為稍待、以有数家人有取舍故耳。旬日間当続有奉聞也。詩集序跋悉听卓裁、倘多得名家題詠、以光斯集、不勝欣幸。尚有詩集数種、于数日及再行寄奉蘇城。（吟香からの返事を昨日受取りました。手紙によると選定は全て素晴らしく、刻工もまた素晴らしいので次々と版刻をお願いします。ただ三十五卷以下について翻刻をお待ちいただき、採録について取捨選択を行いたい）」と述べ、旧雨社同人達が指摘した問題点について伝えていない。

なお、この「岸田吟香書翰」には、旧雨社の詩会后に小野湖山が吟香に宛てた書翰（明治十六年三月十九日）が同封されており、この中で湖山は、「詩選」之件、愚論御采用之趣至喜々々、何卒先老編早々出来候事奉祈候（※岸田註 第一編、第二編ト続出ノ論也。」と述べており、『詩選』編纂に関して様々な意見を言ったものの、すみやかに一編・二編と刊行することを望んでいる。また、心泉は兪樾に対して卷三十六以下に採録する僧侶・女性に関しては翻刻を待つよう求めているが、これも旧雨社の席上で湖山が述べた「釈氏閨秀ノ部ニモ亦必ラズ省クベキ者多カラン」を受けてのことであろう。なお、兪樾が非常に気にして何度も照会していた姓・字・出身地等の記載についても、日本側は兪樾ほどは気にして居らず、分からなかった人物に関しては、「□□□□」と空白のまま翻刻されたのであったが、これも湖山が「或ハ名字歛ト被成候而モ、海外之事ニ付、不苦候様ニ御座候（あるいは名字が欠落しておりますが、海外のことゆえ、お苦しみになりませんように）」と述べたことを受けてのことであろう。このように、旧雨社の詩会では様々な意見が出されたが、最終的に心泉は同会のみならず、明治詩壇の中心人物である湖山の意見を優先して兪樾に伝えたのである。

前述したように「兪樾尺牘五」（明治十五年十一月一日）で、兪樾はすでに編輯方針や版式・金額・採録数・巻数について決定していたにもかかわらず、吟香は兪樾に編纂を一任しており、本来吟香が選集を期待した『詩選』は、序文に「然此集也、在彼国実為総集之大者、必且家置一編、以備誦習（然れども此の集や、彼の国に在りては、実に総集の大なる者と為す。必ず且（まさ）に家ごとに一編を置きて、以て誦習に備へんとす）」とあるように、兪樾の手によって総集として刊行されることとなったのである。

このように、『詩選』の編纂は当時の文人たちのあずかり知らぬところで進められ、いざ出版の段階で内容が公表されてみると、存命中の人物、評判の悪い人物、無名の人物、多数の僧侶の漢詩などが収録された一方、歴代のしかるべき人物の漢詩が採録されておらず、修正を要求したものの、必ずしも反映されなかった。重野ら当時の文人たちにとっては不満であり、妙な漢詩集だと思つたに違いない。

おわりに

最後に、刊行された『詩選』や兪樾の学問について、日本の詩壇や学術に与えた影響について確認しておきたい。

『詩選』刊行後、兪樾のもとには関口隆正・榎原陳正・重野紹一郎が入門し、佐藤楚材・橋口誠軒・結城蕃堂等のように揮毫・題字・序跋を求める日本人が増加した。⁶⁶

では、明治十六年（一八八三）以後に刊行された『詩選』はどのような評価を受けたのであろうか。小野湖山のように、『詩選』の編纂が契機となつて兪樾との詩文の交流が始まつた人物もいたが、当時の日本の漢詩壇ではあまり反響がなかつたようである。

理由として、旧雨社同人たちが指摘したように採録された漢詩が日本人からみて不適切・不充分であつたことが考えられ

るが、そもそも『詩選』自体の刊行数が少なく入手困難であったことから、『詩選』を実際に読んだ人はそう多くなかったことと思われる。また、旧雨社同人と同世代である根本通明や依田学海らの兪樾に対する評価も、決して芳しいものではなかった。⁽⁶⁷⁾

『詩選』の出版により「中国人の大学者がいかに日本漢詩を評価したか」という関心は、明治前期に活動していた江戸時代からの流れを受けた漢詩人たちにはあまりなく、むしろ次世代に生まれた小柳司気太・内藤湖南・新村出・鈴木虎雄・久保天随・今関天彭⁽⁶⁸⁾といった、主に支那学者によって明治後半から昭和にかけて持たれ、かつ評価されたのであったといつてよいだろう。

註

(1) 兪樾(一八二一〜一九〇六)。河南学政提督を担任し、曾國藩・李鴻章らと関係が深かった。北方心泉が面会した当時、兪樾は蘇州に居住し、杭州に別荘を持っていた。

(2) 『書苑』(三省堂、昭和十八年)。

(3) 三宅真軒(一八五〇〜一九三四)、名は貞、通称は少太郎、字は子固、松軒のち真軒・大小廬と号した。学問は富川春塘・井口犀川・永山亥軒・金子松洞に習っていたが、犀川歿後は独学を続け、前田家より流出した『四庫提要』を精読したとされる。明治八年(一八七五)ごろから同十六年(一八八三)にかけて益智館という本屋で働いていたが、明治十六年(一八八三)以降、石川県専門学校・石川県尋常中学校・第四高等中学校教員を歴任する。『詩選』の完成した翌年である明治十七年(一八八四)、加賀の藩政時代の蔵書についての目録『石川県勸業博物館書目』巻一を編輯している。明治三十六年(一九〇三)から大正五年(一九一六)まで広島高師で教鞭を執り、以後は東京に移り前田家の書籍を整理し『尊経閣文庫漢籍分類目録』(昭和八・九年)を編輯するなど漢学に詳しい人物であった。

(4) 本岡三郎『北方心泉 人と芸術』(二女社、昭和五十七年)。

(5) 北方心泉(一八五〇〜一九〇五)、金沢・常福寺第十四世住職。名は蒙、心泉・小雨・月莊・文字禪室・聴松閣・酒肉和尚などと号した。明治十年(一八七七)から明治十六年(一八八三)まで清国布教事務掛として上海別院に勤務する。明治十六年(一八八三)に肺病のため帰国し、長崎での療養生活を余儀なくされる。その後、三軒真軒の助言のもと書学を本格的に学び始め、明治二十三年(一八九〇)に開催された第三回内国勸業博覧会に書作を出品し入賞しており、一般には楊守敬とは別にわが国に北派書風を持込んだ書家として

知られる。

- (6) 上海人民出版社、一九九九年。
- (7) 勉誠出版、平成十九年。
- (8) 『文学』四六号（岩波書店、昭和五十三年六月）。
- (9) 『島大言語文化』第一号（島根大学法文学部紀要、平成八年）。
- (10) 汲古書院、平成十七年。
- (11) 『文芸論叢』第六六号（大谷大学文芸学会、平成十八年）。
- (12) 『大谷大学大学院研究紀要』第二三三号（大谷大学大学院、平成十八年）。
- (13) 松林孝純（一八五六頃〜歿年未詳）、清国における号は行本、越後糸魚川正覚寺に生まれる。大阪の難波別院教師校支那語科で汪松坪より南京語を学ぶ。明治十四年（一八八一）十一月、本山経学部より清国留学を命ぜられ、蘇州で蘇州語を学ぶ。この間、兪樾『東瀛詩選』編纂に際して聯絡役をとめる。
- (14) 本章執筆にあたっては、三浦叶『明治漢文学史』（汲古書院、平成十年）、倉石武四郎『本邦における支那学の発達』（汲古書院、平成十九年）、乾照夫『成島柳北研究』（ぺりかん社、平成十五年）等を参照した。
- (15) 松本白華（一八三八〜一九二六）、加賀松任の人、本誓寺の第二十六世住職。名は嚴護、白華・西塘・仙露閣などと号す。幕末、大坂で広瀬旭荘の塾に学ぶ。明治五年（一八七二）四月、教部省に出仕、九月、新門主・大谷光瑩（現如）や成島柳北らと共に欧洲視察を行う。翌年帰国、教部省に再出仕し、明治十年（一八七七）十月から十二年（一八七九）二月まで東本願寺上海別院輪番を勤めた。洋行をはさんだ前後、玉川吟社・香草吟社に所属し、長三洲をはじめ明治の高官たちと漢詩による交流を行っている。
- (16) この他、明治三年（一八七〇）九月には星巖門下の鱸松濤の七曲吟社、向山黄村の晚翠吟社などが設立された。
- (17) 『宜園百家詩二編』巻四。
- (18) 松本白華と玉川吟社・香草吟社については、「松本白華と玉川吟社の人々」（二松学舎大学21世紀COEプログラム『日本漢文学研究』第二号、川邊雄大・町泉寿郎共著、平成十九年）を参照されたい。
- (19) 第十五号（明治十年七月四日）、「次人観都踊之韵二首 加賀心泉迂生北方」。
- (20) 竹添井々は、明治十年（一八七七）に蘇州で、日本人で最初に兪樾に会った人物であり、心泉に紹介状を書いた。竹添は度々上海を訪れ、明治十一年（一八七八）には上海で客死した陸軍中尉、向郁の墓碑文などを書いており、当時日本人墓地を管理していた香頂や白華・心泉ら上海別院在勤の布教僧とも面識があったものと思われる。
- (21) 佐藤三郎「中国における日本仏教の布教権をめぐる…近代日中交渉史の一齣として」（『山形大学紀要（人文科学）』第五卷第四号、昭和三十九年）。
- (22) 政府と緊密な関係にあった西本願寺は、海外布教は時期尚早と見ており、清国で布教を本格的に開始するのは日清戦争後である。

- (23) 当時、井々は体調を崩して帰国中であつた。井々は李鴻章と琉球の帰属をめぐる交渉に当たっており、松崎鶴雄『柔父隨筆』（座右宝刊行会、昭和十八年）によると日清修好条規の問題点について認識しており、布教権についても良く認識していたと思われる。
- (24) 東本願寺では、同年十一月に大阪の難場別院で南京語を学んだ松林孝純と松ヶ江賢哲を、蘇州と杭州にそれぞれ語学習得のため派遣した。
- (25) 王宝平『清代中日学術交流の研究』（註10に掲出）。
- (26) 吟香は、編者の陳鴻誥とはすでに上海で面識があり、また旧雨社に参加し同詩選に採録された小野湖山とも面識があつたので、出版前に本書が編纂されていることを知っていた可能性がある。
- (27) 註9に掲出。
- (28) 註10に掲出。
- (29) その後、兪樾は心泉や檜原陳政に日本の桜を送ってくれるよう依頼するなど、日本の事物に関心を持っている。
- (30) 「心泉草稿七」（日附不明、明治十六年（一八八三）三月十七日〜二十七日）、「兪樾尺牘十三」（同五月十一日）。
- (31) （前略）近年頻りに日本人の著書を好み、既に数百部を珍藏せりといふ。先年、竹添井々子より日本人の詩文を得て大に之を愛し、其後また西京の僧心泉に托して多く日本近古の詩文集を求め、一部の日本詩選を編纂せられしか、数年の校訂を経て近頃既に其初編を刊行せりと聞けども、未だ上海の書林にハ発売する者なし。蘇城の知人に托して一部を求めんとす。（以下略）
- (32) 『朝野新聞』明治十七年（一八八四）四月五日、「吳中紀行」。
- (33) 清国兪曲園太史編纂 東瀛詩選 初帙四冊定価金一円廿五錢
（前略）今、初帙先づ成る依て本舖に於て之を発売二帙三帙も亦相繼て竣功すべし四帙に至て全備す通計十六本なり伏して望む四方吟壇の諸大家幸に先睹を以て快とし速に講閲を賜はらんことを 東京銀座三丁目岸田店 樂善堂書房謹白
- (34) 岡千仞は、同年七月に蘇州で兪樾と面会しており、『詩選』に自分の詩が採録されたことに感謝の言葉を述べている。しかし、草森紳一は『文字の大陸 汚穢の都―明治人清国見聞録』（大修館書店、平成二十二年四月）の中で、この時期にはまだ千仞の詩を収録した巻三十四は出版されていない可能性を指摘している。
- (35) 北山は漢詩集が刊行されておらず、遺された漢詩も少ないことから、兪樾は北山の漢詩について見ていない可能性が強い。
- (36) 佐野正巳「解題」（『東瀛詩選』（景印版）、汲古書院、昭和五十六年）、小川環樹（註8に掲出）、蔡毅（註9に掲出）。
- (37) 高島氏は『東瀛詩選本文と総索引』（勉誠出版、平成十九年）の中で、『詩選』編纂に使用された漢詩集は一六七集としている。蔡毅氏は「兪樾と『東瀛詩選』」（註9に掲出）で、一六三集（個人詩文集一四二集、選集二十一集）としている。
- (38) 岡井慎吾「北方心泉上人」（註2に掲出）。
- (39) 内藤湖南「山梨稲川の学問」（昭和二年五月十五日稲川先生百年祭講演、昭和四年六月発行『山梨稲川』所載）。
- (40) 小川環樹（註8に掲出）。

- (41) 岡井慎吾「北方心泉上人」(註2に掲出)。
 (42) 旧雨社の会合を指す。
 (43) 重野成斎(一八二七〜一九一〇)。「詩選」編纂当時、清国公使館員と盛んに交流を行っていた。
 (44) 岡鹿門(一八三三〜一九一四)。明治十七年(一八八四)には渡清し、『詩選』編纂に携った布教僧の松林孝純の案内で愈樾と面会している。「詩選」に七首採録する。
 (45) 森春濤(一八一九〜一八八九)。「詩選」に一六首採録する。
 (46) 鱸松塘(一八二四〜一八九八)。「詩選」に一四首採録する。
 (47) 祇園南海(一六七六〜一七五二)。「詩選」に三首採録する。
 (48) 秋山玉山(一七〇二〜一八六三)。「詩選」に二首採録する。
 (49) 雨森芳洲(一六六八〜一七五五)。「詩選」に一首採録する。
 (50) 片山北海(一七二三〜一七九〇)。「詩選」に一首採録する。
 (51) 武富圮南(一八〇八〜一八七五)。白華とともに、玉川吟社に所属しており、本誓寺に集合写真が残されている。詳細は「松本白華と玉川吟社の人々」(註18に掲出)を参照されたい。
 (52) 韓天寿(一七二七〜一七九五)すなわち中川長四郎のこと。
 (53) 柏木如亭(一七六八〜一八一九)のこと。
 (54) 北川猛虎(一七六二〜一八三三)のこと。
 (55) 家里衡(一八二七〜一八六三)。「詩選」に一首採録する。
 (56) 河野鉄兜(一八二五〜一八六七)。「詩選」に八首採録する。
 (57) 己二星巖之分ハ上木ニ相成り、試刻御廻シ被下候位ニ付、其前ノ処、徂徠・南郭等之分モ己二刊行ニ相成候哉モ不被計ト奉存候。又、其後モ引続キ割剛ニ御付シ相成候哉モ難計ト奉存候。若シ右様之儀ニモ候ハ、大抵星巖・淡窓等之処迄ニ而御切り被下、是ヲ第一集ト歟、第一帖ト歟御定メ被下候様奉願度候。
 (すでに梁川星巖の漢詩は上木となり、試刷りに廻っているのので、梁川星巖の前に採録されている荻生徂徠・服部南郭の漢詩もすでに刊行されたかも知れないと思います。またその後も引続き印刷されるかも知れないと思います。もしそうなれば、梁川星巖・広瀬淡窓の漢詩のところまで切って、これを第一集とか第一帖などに定めていただくようお願いいたします)
- (58) 川路利良(一八三四〜一八七九)。薩摩の人、号は龍泉。初代警視総監などを歴任した。漢詩集に『龍泉遺稿』(明治十四年)がある。
 (59) 長三洲(一八三三〜一八九五)。「詩選」に一七首採録する。
 (60) 「岸田吟香書翰」(心泉宛、明治十六年三月二十一日)。
 一 御示シ被下候選定目録ハ、兼而御沙汰之通り此度御返シ申上候。然ルニ、重野成斎江差シ置候処、無遠慮ニ朱ヲ以而相汚シ、甚申

訳も無之次第第二御座候。併シ、此人名上ニ朱圈ヲ点シ候分ハ暫ク選ヲ御省キ下サレ候様致シ度、其印シニ付ケ置候符号ニ御座候。

(61) 岡井慎吾「北方心泉上人(三)」(註2に掲出)。

三宅先師が「川路大警視の詩が有るので、嫌になつた」と云はれたを思ひ出される。

(62) 小栗憲一『布岳懷旧詩史』(大正五年)。なお、五岳が住職をつとめた専念寺(大分県日田市)には、布岳が描いた西郷隆盛の肖像画が所蔵される。

(63) 『真宗全書』七十二卷所収。

(64) 京都大学図書館蔵、『真宗全書』七十二卷所収。

(65) 明治十二年(一八七九)に来日した王翰の日本旅行記『扶桑遊記』は二十五銭で販売されている。

(66) 兪樾が序文を書いた書籍には、佐藤楚材『牧山楼詩鈔』(明治二十三年)などがある。

(67) 『学海日録』明治二十年(一八八七)十一月十八日。

(68) 小柳司気太「兪曲園に就て」(『東洋思想の研究』、森北書店、昭和十七年)、久保天随「漢学研究法」(『国語漢文講話』、早稲田大学出版部、明治三十九年)、鈴木虎雄「山梨稲川の詩」(『藝文』、第三年第八号、明治四十五年)、内藤湖南「山梨稲川の学問」(註39に掲出)、新村出「稲川の人物学問の大観」(『山梨稲川集』第四卷、山梨稲川集刊行会、昭和四年)、今関天彭「山梨稲川」(『書苑』第三卷七・八号、三省堂、昭和十四年)。

〔謝辞〕 本稿執筆にあたり、常福寺前住職・北方匡氏、本誓寺前住職・故松本梶丸氏、白山市立松任図書館、北方心泉顕彰会、各寺御門徒の方々には、資料の閲覧・撮影等に御高配を賜りました。厚く御礼申し上げます。

〔附記〕 本稿は、日本学術振興会・科学研究費「北九州の真宗を例とした仏教近代化に関する基礎的研究」(基盤研究C、平成二十四～二十六年度、文化学、課題番号24617018、研究代表者・川邊雄大)によるものである。

【キーワード】

・近代日中文化交流 ・兪樾(曲園) ・『東瀛詩選』 ・北方心泉 ・岸田吟香